
父を偲ぶ

大輔華子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

父を偲ぶ

【Nコード】

N9628I

【作者名】

大輔華子

【あらすじ】

この物語はフィクションです。主人公も登場人物もすべて架空のもので。もちろん、お父さん、あなた自身もこの物語には登場していません。フィクションなのですから。

この物語はフィクションです。主人公も登場人物もすべて架空のものです。

もちろん、お父さん、あなた自身もこの物語には登場していません。フィクションなので。しかしながら、この物語に、現実と酷似した内容も多く含まれてしまっていることは否定しません。どうか、遠く離れてしまったお父さん、そのことはお許しください。

あなたが決してこの物語にお怒りにならないよう、決して悲しまれることのないよう。

私はお父さんの亡骸の前に立っていました。狭い部屋の中には葬儀社の方一人、私と私の弟、そして、物言わずベットに横たわったお父さんがいます。私はそっとお父さんの額に手を当ててみました。冷たい。

季節は3月中旬でしたが、病院の部屋の空気は暖かく、お父さんはどうしてこんなに氷のように冷たいのだろう、と思いました。

その時私はお父さんの本当の「死」を実感しました。

お父さんは、子供のころの私のまわりにはいつも居ませんでした。

高度成長期時代に銀行員だったお父さんは、当時どこにでもいるモータリッソ社員の一人だった、と母は言います。

それでも当時の会社員は、心の中まで家庭を顧みなかったのではなく、むしろ今の家庭的なお父さん達よりも、家族を守っている、家族という一番大切なものを守らなければならない、という意識は高

かったのではないかと思えます。私が社会人になって1年生の秋、会社の飲み会で正体を失くすほどに酔いつぶれ、同僚の男の人に家まで送ってきてもらった時の話。父はわざわざ私を連れてきてくださった人に、「娘をこんなに酔わせてとんでもない奴だ！」と怒鳴りつけたと聞きました。本当にどうにもならない親馬鹿なお父さんです。私の弟が交通事故で足を不自由にしたときも、お父さんは見舞いに来た車の運転者の人に病室で突然殴りかかって、泣きながら大声で「息子の足を返せ！」と病院の中を走り回りました。お母さん曰く、仕事では自分に厳しく他人には寛容な人格者だったというお父さんも、家族のことになると人が変わってしまうようでした。

弟は交通事故で片足を失い車椅子。お母さんは5年前脳出血で倒れ、右半身不随になって今では車椅子。そして癌で亡くなってしまったお父さんも亡くなる前まで病院で車椅子。車椅子だらけの家族でした。それでも、気持ちが折れそうになっていた私をいつも心で支えてくれたのはお父さんでした。「おまえはいいよ。とつてもいい。頑張り屋だ。今にお父さんもよくなって、また一緒に家で暮らそう。」

通夜ふるまいも済み、先ほどまでの騒がしさが嘘のように三間続きの端の部屋にお父さんがひとり横になっていました。間ひとつの部屋を隔てて反対側の部屋には疲れ果てた私が座り込んでいました。お葬式とは何だろう、明日は葬儀か。

柱時計はもう11時を少し過ぎたところを指していました。明日ま

た泣いてしまつてあろう自分を想像して、何だかいたたまれない気持ちで私の胸を一挙に襲いました。お父さんがまだ「形」あるうちに、もつともつと、ずっとずっととお父さんと居たい、本当に明日でお別れなの？朝が来ないで欲しい。そう思いながら、私はいつの間にかうとうととしていました。はっと気付いて眠い目をこすりながら、一人で布団を敷き、もぐりこんでその中で隠れるように嗚咽していました。

どれほどの時間が経ったのか、私は目を覚ましました。いけない、お父さんは今日で私のもとからその姿をなくしてしまう、こうしてはいられない、お父さんと一緒に寝よう。

私は急にそう思いました。もうどうしようもなく。私はおとうさんの寝ているほうに目を向けました。

お父さんは向こう側の横を向いて寝ている。どうして？上向きで布を載せていたお父さんの顔が向こうを向いている。誰がいつお父さんの体を動かしたの？そんなことって。私は訳が分からなくなり、頭にはものすごい轟音がめぐっていました。私は薄暗い部屋の中で、もう一度目をしっかりと凝らしました。やっぱり横を向いている。お父さんの体は背中が上がって完全に横を向いている。「お父さん！」声を掛けようと思つても声が出ない。お父さんのところへ行こうとしても、あまりの驚きに腰が抜けたようになり、体がびくりとも動かない。金縛り？いや違う。押さえつけられているわけではない。お父さんは生きています。理由なんかどうでもいい、今、生きて

いるんだ、私はそう思いました。

お父さんは、私の見ている前で上半身を起こし、向こうに顔を向けたまま首を左右にこきこきと傾げました。それからゆっくりと立ち上がりました。お父さん、なんで？立てなかった筈じゃない。お父さんは1年余りの病院生活で、足が細り、関節が固まってしまって歩けなかったのです。お見舞いに行く度、私はお父さんを車椅子に乗せ、病院の中を押しながら歩いていたものです。お父さんが立ち上がった瞬間、私はじっと目を閉じ、考えをめぐらせました。これは夢だ。でも、夢らしくない。いやあまりにもはつきりとしている。布団の感触も、部屋の様子も、うやむやなものは一切ない。これは現実だ。絶対夢じゃない。

もう一度お父さんのほうを見てみて、幽霊か？それなら理解できる。あれはお父さんの肉体ではない。そう思ったとき、お父さんはついに部屋の左側、廊下側のふすまへ向かって歩き出しました。

私はこの時はつきり幽霊ではなく生身の体だということを確信しました。何故だかわからないけど、少なくともお父さんは「今」生きている、そう考えたのです。

それにしても、肝心の私はだらしない。腰が抜けてしまって全然動けない。声も出せない。

私はもう一度落ち着きを取り戻すため目を閉じました。お父さんは自分が死んでしまったことになっていて、明日自分の葬式だつてことを知らないのだろう。そうに違いない、私が今すべきことは、誰かに、何故だかわからないけどお父さんが今生きている、ということ伝えることだ。いや、そうではない。そうしているうちにお

父さんは本当に亡くなってしまいかも知れない。そうであれば亡くなってしまふ前にお父さんともう一度話をしよう。そう思って目を開け、お父さんのいる部屋のほうを見ようとした時、なんとお父さんは私の目の前に立っていました。布団に横になり、腰が抜けて動くことの出来ない私のほうを見下ろして。

お父さんは、かつと大きな目を見開き私を見つめていました。そして次第に目には涙が溜まつてきて、ついにそれが溢れ出てきました。顔はすでに悲しみのためくしゃくしゃになっていました。お父さんは、ほんの一瞬この世へ戻っただけだ、もう自分が長くは生きていけないことをよく知っている、私は強くそう思いました。「お父さん」今度は私の口が動きました。蚊の鳴くような声もお父さんの耳に届いたかどうかよくわかりません。

お父さんは、涙を畳の上にはとほとと落としていました。はつきりと声を出して子供のように泣き始めました。はつとすると、私は少し高いところから、立っているお父さんを見下ろしていました。私はどこにいます？お父さんの下で寝ているのは私？大きな声で泣きじやくるお父さんの下、布団の上で目を閉じて横になっているのはまぎれもなく私でした。私は白装束を身にまとっていました。そのことは、私が今どういう状況にいるのかを、天井のほうから見つめる私に教えてくれることになりました。

私はあらためてじつと過去のことを回想してみました。

病院でのお見舞いの場面。その記憶の中で私自身が車椅子に座っていました。私の足は痩せ細り、間接が固まってしまっていて何だか横に曲がっているようでした。そんな足で、もうどんなに努力しようとして立つことはできません。私の胸も、おなかも、つぶれた風船のようになっています。私が病室で車椅子に座ったまま首を後ろへ振り向かせると、そこにはにっこりと頷き、「おまえはいいよ。とつてもいい。頑張り屋だ。今におまえもよくなって、またお父さんと一緒に家で暮らそう。」と言ってくれるお父さんがいました。お父さんは車椅子を押しながら病院の廊下を何度も何度もぐるぐると回ってくれました。お父さんは満面の笑顔です。でも目にはときどき薄っすらと涙のようなものが光っていました。

お父さん。もう泣くのはやめて。私はずっとずっと一緒だよ。お別れが悲しいのは私も一緒だよ。泣くのはやめてお父さん。お願いだから。

(『父を偲ぶ』平成21年12月)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家なるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9628i/>

父を偲ぶ

2010年10月12日17時03分発行